
右腕の契約

三亜野 雪子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右腕の契約

【Nコード】

N8254C

【作者名】

三亜野 雪子

【あらすじ】

Mutuallove・・・の番外編。ソウシとローウェのお話。ロ・ウェ中心です。

壮大な世界。

終わりの無い世界。

その重さに耐え切れず、苦しむ少年がそこにはいた。

満月の夜に彼は誰もいない森の中にいた。木々がそこだけ避けて、ちよつとした広い空間を作り出している。

「俺はこのまま死ぬのかな？」

月明かりが彼を照らし出す。燃えるような赤い髪をした彼はまだ幼さの残る顔を空に投げていた。

彼はある盗賊団のボスの右腕。他の大人達を差し置いて一気にこの地位に上り詰めた。

親も友もない彼はいつも孤独だった。そのためか、世界の壮大さに目眩を起し始め、いつしか死を悟り始める。

「お前、抜け出したいんだろ？」

誰もいないはずのこの場所に彼以外の人の声が響いた。驚いて声のする方へ視線を送れば、木々の陰から月の光を反射する金色こんじきの髪を風に揺らす子供とも言える少年いた。

歳はおそらく十三、四歳。丸っこい輪郭には似合わない無表情の整った顔。白い肌。深い青い瞳。その完璧さに思わず息を飲んでしまった。

「お前は？」

「俺？俺はソウシ・ロール・ケイ。お前『血まみれの契約』のローウェ・ハース・イエーだろ？」

あまり知られていない自分の盗賊団の名前を出され一瞬心臓が大きく跳ねた。しかし、年齢に合わないくらい表情は変えず、ローウェは目を細めた。

「そうだけど？」

「…………俺がお前をその盗賊団から逃してやるよ」

相手の意図が読めずローウェは怪訝な顔をした。ソウシの顔に何か違和感を感じて、顔を^{しか}顰める。
未だに表情を崩さない彼はどこか普通の人とは異なっただものを感じたのだ。

「ソウシって言ったな？俺の願いを叶えてくれる見返りは何だ？」

「別に。俺をその盗賊団の右腕にしてくれれば別にいいんだよ」

予想外の言葉に^{ひたひた}暫く思考が止まった。今までにいない、今までの中

で最も印象的な出逢いがその夜の出来事だった。

「ほお、人ではできない特別な力か」

「別にやることなくて暇だから、ここに入ろうかと思って。駄目か？」

「いや、面白い。ローウェに当分世話してもらえ」

ソウシがその盗賊団のボスに気に入られるのはさほど時間は掛からなかった。ローウェの紹介のもと、彼はこの盗賊団に入り、様々な実績を積む。

人では有り得ない力を使う度に盗賊団の仲間達からは白い目で見られていく。その様子をローウェは見守っていた。

「お前、本当は何がしたいんだ？」

「何もない。別に」

「……………レイって誰のことだ？」

「——っっ！！」

ローウェが知るはずもない名前にソウシは顔色を変えた。今まで見たこともないその表情に今度はローウェが驚愕した。互いに互いを見つめて、口を開こうとはしなかった。

「どこで……………それを？」

やっと口を開いたのはソウシだった。ローウェは少し訳なさそうに視線を逸らして、独り言のように小さな声音で答えた。

「この前、お前が寝ている間に微かに呟いてたんだ」

人前で寝顔を見せることのないソウシが、珍しくローウェより早く寝床につき、天使のような寝顔を見せていた。その姿を物珍しそうに見ていたら不意に彼の口が微かに動いたのだ。

『レイ、……………レイ』

ソウシは苦い顔を作り、視線を逸らした。彼が本音を言うことも、過去のことを話すことも今まで一度もなかった。しかし、ローウェはずっと気になっていた。

「はつきり言うぞ。お前は何処でその情報を手に入れたか分からないけど、俺のことを知っておきながら自分のことを俺に話さないのは不公平だと思わないか？」

彼の声はかなり陽気で緊張感のないものだった。内容と外見のギャップに思わずソウシは吹き出しそうになる。それを何とか堪えてローウェをじっと見つめる。

ふと、珍しく彼は顔を崩した。今までで見たことのない人間らしい笑みに一瞬見惚れるほどだった。

「お前、面白い奴だな。ローって呼んでいいか？」

「あ…ああ」

「そうだな。確かに……その必要はあるかもしれない」

そして彼は信じられないような話をゆっくりとローウェに紡ぎ始めた。

『ケイ。今日は何の本を読みましようか？』

『感情って……何でしょうね？』

『ケイとまた会える日を楽しみにしています』

感情というものがなかった俺に

同じく感情がない君が

感情をくれたんだ。

人間兵器として生まれた俺達二人は双子のような存在だった。

人とは違う、人とは異なった能力を持つ俺達。

感情がなかった。

代わりに人の心の色が見れた。

あの方の言うことでは人との間に感情を見つけることができるらしい。

そんなある日、いつの間にか俺の心の色を見る力は消えていた。

それと入れ替わりにまた違う能力と

『愛しい』という感情を手に入れた。

「俺がお前の身代わりを買って出たのは自由に動ける時間と資金が欲しかったからだ」

想像を絶する内容に頭をくらくらさせているローウェに気付かずにソウシは話を進めていく。

人とは違う、兵器として生まれたソウシ。双子同然の彼女に感情を抱いた。そして、感情を隠したまま離れてしまった。そんな彼女の居場所を突き止めたく、ソウシは今自分に足りない物を考えた。その結果、ここに辿り着いたのだ。

「……………ソウシ、お前は何がしたいんだ？」

「何だろうな。俺にだってわからないさ。ただ、まだあいつを見ていたいんだ。愛しい……………レイを」

「そうか。俺にはそういった感情がないから相談には乗れないな」

恋などはもちろん、彼には普通の愛情さえも理解しがたいものだった。

ある意味ではソウシなどよりも人間らしい感情が欠落している人物

なのかもしれない。

「別にいいさ。じゃあ、契約してくれないか？」

「契約？」

「俺がお前に暴走した振りをして近くに力を使い、お前を死んだことにする。その代わりに俺をお前のポジションに確実につけれる状況を作ってくれないか？」

これが二人の交わした『右腕の契約』。

そして、時は瞬く間に過ぎていき、二人が出会って半年が経った。ソウシの能力は大活躍で、ローウエが死ぬと偽装しなくてもそのまま右腕の地位につけてしまいそうなほどボスに気に入られるようになった。

「ロー、ボスから命令だ。西の山で狩ってこいだってよ」

「了解。じゃあ、行くか」

いつしか二人はいつもコンビを組んで動くようになっていた。そして、この仕事を合図として、互いに違う道を歩み始める。

「レイ……………?!」

「ソウシ?」

仕事に向かう途中、ソウシは木々の隙間から見える金髪の美女に動きを止めた。白い服をまとった彼女はソウシとは違い、黒い瞳をしていて、きよろきよろと辺りを眺めていた。

「何であいつがこんな所に?」

「ソウシ、約束の時間は近付いてるんだ。今は、我慢してくれ」

苦い表情で先に進むソウシを一瞥して、ローウェは横目でレイの存在を認めた。双子と似た存在というだけって、顔立ちや髪の色などはソウシにそっくりだった。

整った顔、透き通る金色の髪、流れるように滑らかなラインを描いた身体。ローウェでも感嘆を漏らしてしまいそうなほど美人だった。

あれが、レイ……………。

完璧なはずの彼女はどこか違和感のある表情をしていた。これが、感情を得ていない者の顔なんだと悟り、彼はソウシの後に続いた。

敵は数人。既に何処からか情報を拾ってきたのかピリピリとした空気を醸し出していた。ローウェは連れてきた二人の部下に静止の命令をかけて、隣りにいるソウシに小声で話しかける。

「敵は数人。俺が出てって**囷**^{おと}になるから力で倒してくれ」

「……………」

「ソウシ？」

はっと意識を戻してソウシは真ん丸とした瞳を彼に向けた。心配そうな視線がソウシを射抜^{いぬ}いた。

先ほどのレイのことが気にかかっていることは理解できた。しかし、ここまで彼が動揺するとは予想外だったため、ローウェも幾分が不安が沸き起こる。

「頼むぞ、右腕の契約だ。わかってるよな？」

「あ、ああ。わかった」

そうだ。今はレイのことを考えている場合じゃない。

気を持ち直して、ソウシは任務に集中した。しかし、やはり頭の中から金髪の美女の顔が離れなく、集中が途切れかける。

そうしている間にもローウエは敵の中を突っ込んでいった。はつきり言っただけの人数ならローウエが本気を出せばすぐに片がつく。しかし、今回のこの任務は遂行するために二人はやっているわけではない。

上手く引き付けて敵を一箇所に集めたローウエ。その瞬間を狙ってソウシは力を放つ。

「火炎!!」

衝撃で地が震えた。木々に火の粉が飛び、物凄い勢いで燃え移ってしまったほどの爆発がその場を襲ったのだ。ローウエ達がいた場所は近づけないほどの炎に占領されて、残された部下とソウシは呆然と見るだけだった。

力が……………狂った?!

足元から冷えるような感覚に襲われる。敵だけを上手く襲うはずだった力は暴走を起こし、炎の中にローウエまでも巻き込んでしまったのだ。

かたかたと身体が震えた。鳥肌が立ち、一点を見つめているはずなのに焦点が上手く合っていなかった。

ロー……………?

「□ー！ー！！」

ヒリヒリと身体が痒い^{かゆ}痛みに襲われて目を覚ました。熱気に当てられて肺が焼けるように痛く、全身が火傷の痛みで動かせなかった。ごおっという炎が酸素を食らう音しか聞こえなかった。ぼんやりと踊り続ける赤いそれに視線を向けていると、耳に他の音が舞い込んでくる。

「ソウ……………シ？」

「□ー！おい！」

「駄目だ！これじゃあ、生きてねえよ。引き戻るぞ」

「ちょ、離せ！□ー！□ー！ー！！」

呼んでる…、行かなきゃ。

あ、だけど駄目だ。

動けない。

肺が痛くて声も出せない。

ソウシ。大丈夫。

俺はここで生きてるから…。

だからお前はそのまま右腕に――。

「そうか。あいつは死んだか」

「…」

「ケイ、お前はあいつの代わりに俺の右腕として働き、今日の無念を晴らせ。いいな？」

ソウシは軽く目を細めて、ただ頷いた。
殺すつもりなど無かった。この寒気と震えと喪失感は一切何なのか、彼にはわからなかった。

自室から出て、彼は外に出る。あの日と同じ満月の夜だった。じつと、ただ眺めていると頬に違和感を感じた。不意に手を当てたらそこには暖かい透明な滴がついていた。

「は、はは。何だこれ」

彼はこの時初めて、失う哀しみを知った。

それから数年。

「最近いい話がねえなあ」

「当たり前だろ。めばしいものは全てあいつが持ってたんだから」

賞金稼ぎが溜まって酒を飲む場所。

二人の男が赤くなった顔で話していた。隣のテーブルで一人淋しく飲んでいた男はその話に少しだけ反応を示した。

「ああ、何だっけ？セイ？サイ？」

「シェイだよ。シェイ・ホープ・ラン。CとAランク隔てなく奪っていきやがる化け物だ」

シェイ……。

「一回横目で見たことあるんだけどよ、真青な髪をして少しでも目立つのに青いマントで身を隠してんだぜ？」

「へえ、狂ってんな」

話を密かに耳に入れていた男は空になったグラスを置いて立ち上がる。そのまま無言で外に出ると頭を隠していたバンダナを取り去った。

陽の光の下では目立つ赤い髪が風に揺られた。黒い上着を着直して、彼、ローウェは歩き出した。

「シェイ・ホープ・ランか。もしかしたらそいつなら」

『血塗れの契約』について情報を持っているかもしれない…。

いた。

宿屋の食堂に藍色の髪青年は腰掛けていた。ローウェは唾を飲み込んで、深呼吸をする。

気付かれてはいけない。

気付かれれば俺の命は無いからな。

「なあ、お前シェイ・ホープ・ランだよな？」

意を決してローウェは無表情なシェイに声をかけた。彼はちらりとローウェの方へ視線を向ける。

「……………」

無言かよー！

冷たい空気に耐えながらも、ローウェはめげずに明るい声で話しかけた。でなければ、軽くあしらわれそうで不安だったから。

「俺ローウェ・ハース・イエー！俺達お似合いだから、一生一緒に

やっていかないかい？」

言った後に後悔する。これじゃあ、どこかの馬鹿な男がプロポーズに言う言葉みたいだった。これでは普通に言った時よりも簡単にあしらわれてしまう、と頭を真白くする。

「……………ホモならホモらしくホモ同士で一生ホモってろ」

想像以上にきつい言葉が降ってきた。泣き出したいところを何とか堪えてローウエは仕切り直して言葉を繋ぐ。

「いや、今の言葉は少しはっちゃけ過ぎた。つまりだ、ある大物賞金首の依頼が個人として俺のところに来ている。この依頼をお前に提供する代わりに力貸してくれないか？」

切り札として隠し持っていた賞金首の紙をちらつかせた。シェイは無言でその紙を受け取り、相手と金額を確認する。

自信満々な顔をしているローウエを一瞥し、シェイは紙を付き返す。失敗か、と溜息をつきそうになった瞬間だった。

「腕は確かだろうな？」

「やってくれるのか?! いやあ、助かる! 一人だったら倒せるんだけどさあ、そこంత何十人もの手下いるとか言いやがってさあ。」

サンキュー」

そうしてローウェはシェイの傍にすることに成功したのだった。

はあ、結局何も無かったな。

シェイとのコンビも解散した後、ローウェは情報を何も得られなかったことに溜息をついた。自分の顔を『血塗れの契約』の者に見られるわけには行かないので、自分で調べに現地に赴くわけにはいかない。

盗賊団のことなどどうでもよいのだが、ソウシについては何故かとても気になる。

あいつはレイを捜せたんだろうか？

金髪の美女を頭の中で思い描いてローウェは目を細める。

考えていてもどうにもならないため、この時考えるのは断念した。そして、年月は過ぎていき、ローウェは何の縁なのか、何度かシェイと組みながらも、賞金稼ぎとしての人生を過ごしていく。

ある時、いつものように賞金首を倒した時、手に感じる肉の感触に眉を寄せてローウエは俯いた。何をしても満足というものがないこの世界。盗賊団にいた時とまったく変わらないその喪失感に彼は次第にあの時の気持ちが甦る。

「どうすればいい？ソウシ……………シェイ」

いつの間にかソウシと同じくらい存在が強くなったシェイも同じく頭に思い浮かべて、ローウエは悩む。この壮大な世界に生き続けていく自信を無くし、これを終わらせる方法が思いつかなかった。

勇気が無かった。

自信がなかった。

やる気が無かった。

だから、一番最悪な道を選んでしまった。

ごめん、シェイ。お前に頼むな。

ごめん、ソウシ。もう、会えない。

ローウエは微かに転がっている情報を集めて、シェイを捜し始めた。

嘘だろ…………。

シェイを捜し出して、やっと見つけたその時。ローウェは信じられない光景を見ていた。いつも無表情だったシェイが優しい表情である人物と一緒にいた。表情が柔らかい時点で驚きなのに、誰かと共に旅をしていて、更にその一緒にいる者が女性で、とどめに知っている者だったのだ。

あれ…………レイ？

金色の長い髪を揺らしながらはしゃぐ彼女は確かにあの時見た金髪の美女で、ソウシの片割れ。ローウェは混乱する頭を整理して、気持ちを落ち着かせる。

ここは、ソウシの賞金首を利用しよう。

何年も『血塗れの契約』について調べてきただけあって、ソウシが隠れ賞金首だということだけは知っていた。それを利用して近付くことを考えた。

ローウェは剣を握って走り出した。案の定殺気を感じてシェイは普通の人以上にも早く反応を示して彼の剣を受け止めた。

思惑通りにまるで偶然のように近付いて、ローウェはあの計画を順調に進めた。

多くの人を哀しませて、俺は死んだ。

「ああ、本当、俺って馬鹿だな」

死ぬ間にやっと手に入れた幸せ。だけど、それは得られるものではないと勝手に判断して、結局二人を泣かせて、一人に会わずに逝った。白く、何も無い空間にふわふわと引力の無い不思議な感覚を感じながらローウエは笑う。

あったかいその世界。だけど、決して現実ではない。夢でもない。ただ、体が無くて、命が無いだけ。天国と言っているのか、彼にはわからなかった。

「ごめんな。ソウシ」

「そう思うなら最初から死ぬなよな」

突然誰もいないはずのその空間に新たな声音が響いた。目を丸くして振り返ればそこには数年前より大きな身体をしたソウシが立って

いた。

空気で彼も同じように死んでしまったんだと、彼は悟る。会えたことへの嬉しさと、できれば生きていてほしかったという願望によって湧き出る哀しみとで、複雑な表情をして彼を受け入れる。

「ごめんな。俺、あの時動けなくて、何も言えなかった」

「ばあか。何で俺がお前のことなんか心配しなきゃいけないんだよ！これっぽっちも考えていなかったさ！」

淋しくも感じるその言葉はソウシなりの優しさなどだと理解して、ローウェは微笑む。

動けなかったせいでソウシを傷つけて。

相棒だった奴を利用しようとして傷つけて。

温もりを感じた大切な人を振りほどいて傷つけた。

それでも、許してくれる。

「ありがとう」

「礼ならキサラに言えよ。お前の死に…泣いてた奴なんだから」

「ああ、感謝してる。キサラにも、シェイにも、お前にも。誰も俺を責めない。優しい奴等…。俺、幸せ者だよな」

どうして、今まで気付くことができなかったんだろう。

この温もりに。

この幸せに。

死んでから気付いたってどうにもならないのに。

「まあ、気付いただけでもいいんじゃない？俺も、気付くのが遅れたんだ。キサラ以外の救いの光に」

あの時、あの右腕の契約をした時に、

次第に膨れるローへの気持ちに気付いていたのなら、

俺の人生は少しは変わっていたのかもしれない。

互いに互いの大切さに気付くのが遅れた。ただそれだけで二人の人生は普通の人よりも早く終わりを告げてしまったのだ。
二人は死んだ身を眺めて、苦笑した。今、ここでそんなことを考えていてもどうにもならないのに、と自分を嘲る。

「そうだな。俺達は最初から決め付けてしまったんだな。何もないと」

ソウシはキサラ以外の救いを。

ローウエは生きる存在価値を。

見つけることができなかった。

「なら、俺達があの世界に行く狭間の世界にいる間だけでも、キサラに、世話になったあいつ等に救いの手を差し伸べてやろうぜ」

今までできなかった恩返しを、死んでからでもいい。ただ返したいと思う。だから、ローウエは無茶を承知で提案する。ソウシもそれを拒否はしない。

この場所にいるだけでも、まだ地上の何かが把握できるうちでも、愛する者を守りたいと思うのは誰もが同じ想いだから。

「ああ」

右腕の契約。

二人の関係はそこから始まった。

もうすぐ二人の意識もおそらく消えてしまうだろうけど、互いの気持ちを再確認した今、普通よりも強くなった錯覚を感じながら、二人はキサラ達を見守る。

二人で可能な限りの恩返しをしよう……。

（後書き）

何だか、長ったらしくせにあまりオチの無い話になりました。
Mutual love・・・が好きな方、この話を気に入ってくだ
さった方、感想評価くださると非常に嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8254c/>

右腕の契約

2011年1月27日02時38分発行